

桜井タカミ ある哲学的画家

サン・ルイ島のランペール画廊が、日本人画家桜井タカミの個展を開いたのは十月のことである。パリではじめて、この哲学的画風を持った画家が紹介されて以来、サン・ルイ島で彼の姿をしばしば見かけることができる。彼の絵は、我々を、見慣れぬ次元の世界へといざなう。即ち、心の内面の世界を表わしてみせるのである。彼は自らの魂を描く。

彼の絵のビジョンは非常に個人的な世界構成を呈示してみせる。それは一種の神秘家の哲学といってよいだろう。

彼のキャンバスは、彼の内的世界のイメージであり、魂のメッセージであるという印象を与える。

桜井氏はもう四年間パリに滞在している。しかし、ほとんど交友関係をつくらず、ただ彼自身のつくった「くすぐり」という名のグループのメンバーの中で、一種独特の孤独の世界に生きている。

彼はすでに、アメリカのサンフランシスコに長く住んでいたことがあり、ビートニックの運動を推進したり、いくつかの展覧会を催おしたりもしている。サンフランシスコ博物館の壁画は彼の手になるものである。桜井氏は、もの静かで穏やかな人物である。彼の作品によって我々は彼の一つの哲学である「運命の享受」という観念を見ることができる。彼のキャンバスには、人間の力ではどうすることもできない「運命」というものの、様々な象徴が描かれている。運命とは甘受されるべきものである。順風のあとには逆風がやってくる。人生は幸福と不幸とが織りあわさったりボンのようなものだ。喜びと苦しみが交互に連っていく。しかし、人生のこの変転の様相は、かりそめの姿でしかない。すべては、夢の果てに雲たちのぼるニルヴァーナ混繋の世界へといきつくのだ。桜井氏の人生観運命観はこのような仏教的静寂の境地とつながっている。スラブ人種が、運命の中に、逃げられない重く暗い力を見てとると反対に桜井氏は運命の中に「やさしさ」をかぎとる。事物の最終的な簡潔な姿を。しかし我々を精神的な実存へと導く道が一体いくつあることだろう。

一つのキャンバスの上に両手をあげた群衆の姿が見える。

これは運命の享受を象徴しているものである。そしてそれらの人物が、赤からブラウンまで、様々な色で描かれているのは、喜びや苦しみの感情を表現しているのだ。そこには有機的、性的、宇宙的な比陰はなにもない。それはただ精神の様相を示している。両手をかかっている女は生命の象徴である。女性はすべての起源であり、乳を与える女は、我々の地上のおよび形而上の実存の母なのだ。桜井氏は、哲学的画家であり、信念をもって、人間を宇宙の光の中に解放しようとして、それをキャンバスに表現するのである。パリに住みながら、パリにとらわれた画家ではなく、彼は瞑想的な孤独中にたたずみ、宇宙の光の流れを自身の中に感じとっているのかもしれない。したがって彼の画風には、これといった顕著な影響関係はみられない。

強いて言えば、インドの仏教画やタントラの密教画のイメージに近い世界であるといえよう。

パリ郊外のバニエールのアトリエで彼は自己の内面の光に照らされつつ制作を続けているのだ。

ランペール画廊 1977年